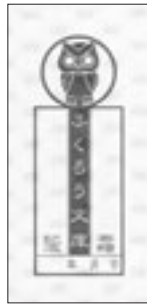


# みんなで作る市民文庫。 文化的価値の 高い本をそろえ 市民の知的財産を 次代に残したい。



ふくろう文庫の蔵書票。  
寄贈者の名前と目的が記され、  
図書とともに長年保存される



ふくろう文庫所蔵の現代最長の絵巻である横山大観の  
絵巻「生々流転」を手にする「ふくろうの会」の皆さん

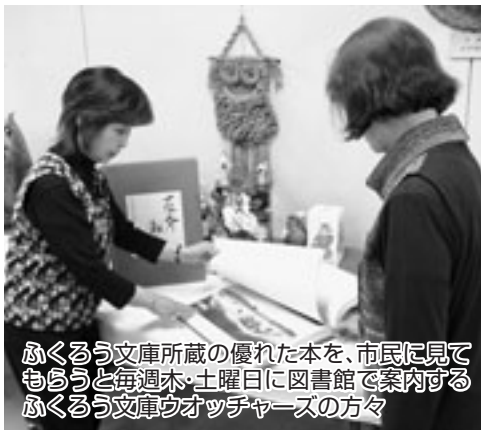


## ふくろう文庫

ふくろうは、古代ギリシャでは女神アテナの従者であり「森の賢者」と称されるなど、知恵の象徴とされている。ふくろう文庫は、平成11年12月、図書館の図書購入費からではなく、市民がつくる市民文庫を作ろうと、前図書館長の山下敏明さんが発案、命名し発足した。市民から、人生の節目や出来事の記念に寄付をいただき、寄付の額に応じた図書を、山下さんが選書し、図書館に寄贈している。

本には、贈り主の名前、贈る理由（初孫誕生、祖父追悼など）、その際に遺したい言葉などを、ふくろうをかたどった蔵書票に記入して一冊ごとに貼っている。収集にあたっては、50年100年たっても文化財として生き残りうる本をそろえて、市民文化の知的財産を残したいという思いが込められている。美術書や画集、写真集などは、値段が高い上に、大きく、重たい物が多く、大きな書店でも置いていない。それを、図書館でそろえて、他都市の美術館に出かけなくても、地元室蘭で世界の芸術を味わえるような取り組みも行っている。

市立室蘭図書館の貴重な知的財産を次代につなげようと、ふくろう文



ふくろう文庫所蔵の優れた本を、市民に見てもらおうと毎週木・土曜日に図書館で案内するふくろう文庫ウォッチャーズの方々

庫を支える「ふくろうの会」が活動している。現在9人で文庫の整理や展示会のお手伝いなどを無償で行っている。また、貴重なコレクションがそろった「ふくろう文庫」の蔵書を市民にも閲覧してもらい、芸術や文化に触れてもらおうという市民も動きだしている。その名も「ふくろう文庫ウォッチャーズ」。30人の市民がボランティアで毎週木・土曜日の10時から16時まで、図書館3階で蔵書の案内役を交替で行っている。

企画展も開催している。あまり目に触れることの少ない本を、より多くの市民に見てもらおう活動は好評。丸井今井室蘭店で行った特別展では、6日間で6千人が足を運んだ。市民手づくりの市民文庫として着実に成長し、室蘭からの文化発信の担い手となっている。

貴重な図書を知的財産として次代に残すことを望む市民の温かい熱い思いによって、蔵書される市民文庫の取り組みは全国的に例がない。ふくろう文庫には、これまでに約270件の寄付、約2千150万円が寄せられ、約3千400冊を蔵書している。室蘭だけのユニークで貴重な取り組みは「蔵書1万冊」という目標に向けて、活動を続けている。



ふくろうの会代表  
よしお 之恒 美男さん

「ふくろう文庫」が誕生して7年。文庫の生みの親であり、購入図書の選者でもある山下敏明氏が、図書館長を平成19年3月勇退しました。

運動の推進役の市民団体「図書館サーブ」に期待する会」は、山下氏勇退後も同氏を購入図書の選者に、今後も文庫活動の継続を決定し、会の名称を「ふくろうの会」と変更。設立当初からの発起人の1人である私が同会の代表になりました。

全国でも類を見ない市民運動によって支えられる「ふくろう文庫」は、今や全道、全国から注目されており、市民の大きな誇りであります。それを支える「ふくろうの会」は、山下氏を顧問に迎え、今後も同文庫推進のため、活動を続けます。

しかし、同文庫の今後のさらなる発展には、市民の理解と協力がぜひとも必要です。充実した図書館は、市民に豊かな時間を約束してくれま

す。ぜひ、図書館に足を運び「ふくろう文庫」をご覧ください。そして、同文庫をご支援ください。

ふくろう文庫への問い合わせ、本の寄贈に関する手続きなどは図書館（☎21658）までご連絡ください。

ふくろう文庫 美術講座「七夕と北斎の謎」（※美術講座は、今後隔月で開催）

7月7日13時から、市民会館に隣接するぷらっと・ていつち集会所手前の子育て室で開催。当日参加をお待ちしています。参加料500円。

本があふれる日本。  
世に出る流行本の  
ほとんどがパルプに戻る。  
本物の本を探そう。

今、日本では、年間約7万種の本が出版されています。それに印刷部数を乗じると途方もない数の本が出版されています。この中には、言うまでもなく、多くの「駄本」が含まれています。駄本とは、読んでも時間つぶしにしかないくぐらぬ本のこと、「トンデモ本」と総称される物などは、その最たるもの。これは「ありがとう」と言えば、水が上質になるとか、「気」で水中のバクテリアが死ぬとかのエセ科学の本を指します。血液型判断、安産できないのは背後霊のせいだとか言う占い物や、週刊誌の見出し数語分で済む内容しか持たないタレント本も駄本です。あきれたことに、これらの駄本を入れて、年間何億冊を超える本が返品され、パルプに戻ります。

リクエストがあるうとも図書



## 特別寄稿

# 図書館そして「ふくろう文庫」

前市長 室蘭図書館長  
山下敏明さん

す。というのは、図書館の主たる役目は、文化財として評価の定まった書物を集めて保存し、それらによってお客さんに知識を付与することであって、今日、ただ今の情勢に乗っかっての娯楽提供という役割は、あるにしてもごく一部なのです。例えば、辞・事典や各種全集の数よりもハリウッドの類がたくさんある。図書館は誉めたものではありません。図書館が持つべき強みは、歴史の風雪に耐えて、生き延びる価値があった本をどれだけ持っているかにあります。例えば「ゲゲゲの鬼太郎」他がありながら、原作者の水木しげるのルーツたる江戸後期の鳥山石燕著「画図百鬼夜行」、そのまたルーツたる中国の「山海経」、そして「お化け博士」と称された明治の井上田了の名著「妖怪学講義」、加えて、日本で最初にお化けを描いた江戸中期の円山応挙の画集等といった、お化けの「古典」がなければ図書館とは言えません。

図書館は、新刊本を無差別に並べる本屋と違って、利用するお客さんに「うわあ、こんな本があるのか」との驚きを与えるべく、選び抜いた善本良書を用意する機関なのです。つまり、図書館でしか見ることかなわぬ良書を多数そろえるのが、長い目で見て結局は、お客さんへの最良のサービスになるのです。

貴重な芸術がそろった  
図書館づくりが始まっている。  
充実に向けた一歩一歩は  
皆さんの協力が頼りです。

とここで、私が「ふくろう文庫」を提案したのも、如上の考えからです。大型美術書は高価で、ほとんど予約で製作されるので、普通には知るも見ることさえできません。「絵や彫刻を見たいなら美術館に行けば良いし、インターネットでも見られる」という人が結構います。が、国内380館の美術館を巡ることは大変であり、ましてや外国となると、もっと大変です。インターネットでは美術の実情がわかりません。国宝のお話をしましよ。展示は禁止されており、国宝を所蔵する所に行っても、いつでも見ることができません。また、例えば浮世絵。日本が唯一世界の芸術に影響を与えた美術ですが、国内では浮世絵専門館が10館もありません。圧倒的に外国の所蔵が多いので、当の日本人が浮世絵を楽しめません。



日本の絵巻物の代表作「古備大臣入唐絵巻」。アメリカ・ポストン美術館にある貴重な作品が、市民の寄付により、ふくろう文庫に所蔵されている

いそれとは見ることができないのです。外国に行ったとしても、ポストン美術館は、世界一の東洋美術所蔵館です。これが誇る「古備大臣入唐絵巻」は、日本にあれば国宝ですが、これを始めとする幾多の作品を、今は劣化の恐れを理由として一般客はおろか、研究者にすら公開していません。現代に目を移しても、我々は自国の文化勲章受章者や人間国宝の作品を容易には知り得ません。これでいいのでしょうか。芸術は、文明の必要部分で、教育と同様、積極的かつ持続的に我々が求め、かつ与えられるべきものです。それ故に「ふくろう文庫」は、それら門外不出の作品の完全復刻版を主として、希少な本を集めているのです。「美術は文化の芳花なり」とは、岡倉天心の言葉ですが、同じ生きるとして、自他共に毎日の生活を彩りたいというのが、我々「ふくろうの会」全員の願いです。私がこの文庫に、学問、技芸の象徴たる「ふくろう」の名を冠した所以もそこにあります。この室蘭の森の賢者の羽ばたきに、何卒、一臂の力をお貸しください。

館は、こうした駄本に手を出してはいけません。ベストセラーなる物も、結果としては駄本が多いことは、その歴史で明らかなのですが、客に押されて10冊はおろか100冊単位で購入した拳句、ブームの後には廃棄もならず「死蔵」に泣いている図書館がたくさんあります。幸いにして室蘭は違います。文芸物にも問題があります。それは個人10人で10冊売れるのと、図書館購入の10冊との違いで、目下、作家の側から、図書館側に印税ならぬ「貸し出し料を払え」との要求が出されていて、これは欧米ではすでに実施されています。

## 見る機会が少ない良書をそろえることが図書館の魅力であり、最良のサービス。

さて、図書館は、本屋、ましてや貸本屋ではありません。図書館は新刊本屋と同じ品ぞろえをする必要はまったくないので